

第 152 回 義和団事件と日露戦争

1 変法運動

- 日清戦争でまさかの敗北を喫した清では、立憲君主政をめざし、日本の明治維新にならった徹底的な改革である（ ）の考えが広まった。



光緒帝

第 11 代皇帝。さわやかな青年皇帝である。理想を追い求めすぎた。

◆（ ）(在位 1875～1908 年)

- 1898 年、光緒帝は、公羊学派の（ ）・（ ）・譚嗣同らを登用して、（ ）という急進的な政治改革を開始した。

※この改革を（ ）という。

→しかし（ ）など保守派の猛反発を招いた。

→（ ）により光緒帝が幽閉され、康有為と梁啓超は日本に亡命し、改革は失敗に終わった。



康有為



梁啓超



譚嗣同

康有為 40 歳、梁啓超 25 歳、譚嗣同 33 歳。公羊学派に属する3人は、写真で見てもわかるとおりとても若かった。27 歳の光緒帝とともに、若者4人が夢見た百日維新であった。



西太后

咸豊帝の妻であり、同治帝は息子、光緒帝は甥にあたる。1908 年に病死するまで、実質的な清の最高権力者であった。評価については、賛否両論ある。

2 義和団事件

- 半植民地状態となった清では、民衆による外国を排斥する運動が起こっていた。
→反キリスト教の運動を（ ）といい、教案という衝突事件も生じた。

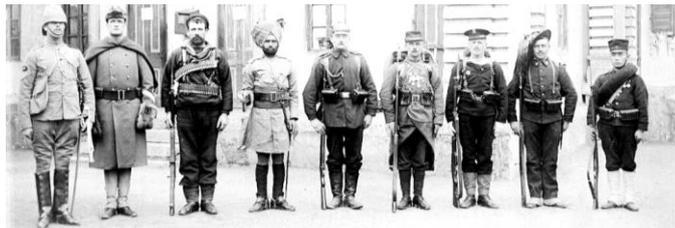
- 1900 年、山東省の宗教結社（ ）が、「 」をスローガンに、鉄道やキリスト教の教会を破壊する運動を行っていた。
→清はこの運動を利用して外国勢力の追放を考え、列強に宣戦布告した。
→列強は、日本とロシアを主力として（ ）を行い、清と義和団を粉砕して北京を占領した。
※この事件を（ ）という。

- 1901 年、（ ）(辛丑和約) を結んだ。
→清は、巨額の賠償金の支払いと（ ）を認めさせられた。
→中国は、欧米列強により半植民地状態になってしまった。



義和団の兵士

義和団は、義和拳という拳法を習っていた。義和拳を習うと、自分の体に関羽や孫悟空が乗り移り、鉄砲の弾も効かなくなるらしい(笑)



8カ国共同出兵

背の高い順に並んでいる。9人いるのは、左から4番目にイギリス領インド帝国の兵が入っているから。一番低いのはやっぱり日本兵…。でも列強の中で最大の兵力を派遣した。

3 日本とロシアの対立

・ロシアは、義和団事件後も中国東部の（ ）を占領して撤退せず、朝鮮への進出を強めていた。

- ・朝鮮（李朝）では、王妃である閔妃殺害事件後に反日感情が高まっていた。
→日清戦争後に日本の朝鮮進出が強まると、1897年には国号を（ ）と改め、独立国として近代化をはかろうとしていた。
→韓国をめぐる日本とロシアの対立が激化していった。
- ・またイギリスも、ロシアの南下政策に対して中央アジアなどで対立を強めていた。
→「光榮ある孤立」を捨てて、1902年に日本と（ ）を結んだ。



ブルシ人のゲリラ 逃げるイギリス軍



当時イギリスは、南アフリカ戦争(ブール戦争)で大苦戦しており、義和団事件の際は大軍を派遣できなかった。これが日本との同盟につながる。第145回を見よう。



ロシア皇帝ニコライ2世

ロシア伝統の南下政策を進めるなかで、イギリスや日本との対立を強めた。後にロシア革命で処刑され、最後のロシア皇帝となる運命にある。

4 日露戦争

・1904年、対立する日本とロシアの間で、（ ）が始まった。
→日本は苦戦しながらも旅順と奉天を占領し、（ ）に勝利したが、長期戦は不可能だった。

- ・ロシアも、1905年の（ ）に始まる第1次ロシア革命で国内が混乱し、戦争どころではなくなっていた。
- ・1905年、アメリカ大統領（ ）の仲介で、日本とロシアは（ ）を結んで講和した。
→ロシアは、（ ）、（ ）の領有権を譲った。
- ・また、（ ）の租借権と東清鉄道南部の利権も日本に譲った。
→日本はそこに関東州を設置し、（ ）株式会社を設立して支配した。
- ・ロシアはアジアでの南下政策を断念し、ヨーロッパでの南下政策を再開した。
→日本とイギリスは、ロシアと対立する理由がなくなった。
→1907年、日本は（ ）、イギリスは（ ）を結び、逆にロシアと接近した。
- ・また日本とアメリカは、桂=タフト協定でお互いの権益を認め合った。



日露戦争の風刺画



ドラマ「坂の上の雲」

日露戦争は、日本史の大きな転換点となったが、世界史の視点から見ることも重要である。とりあえず「坂の上の雲」を観よう(読もう)。



ロシア代表ウイッテ

日露戦争後は、首相として外国資本の積極的な導入などロシアの近代化に努力したが、反対派によって失脚した。



アメリカ大統領 T=ローズヴェルト

日本を支援してはいたが、アメリカの中国進出のためには、日本とロシアのどちらかが大勝することは望んでいなかった。